

をためらい諦念するにいたる気持ちの動きが描き出されています。「教えること自体にはやりがいがあったのですが…」等々の表現からは、しんどさを突き付けられ半ば放置されている学校の物質的環境という現実と直面し、自信を失ってしまっていることをめぐる複雑な心境が読み取れます。

第二に、教職の現状が厳しくなればなるほど、「弱さ」という価値を排除する傾向があり、結果として健康や体力に自信のない若者たちを排除してしまっていることが読み取れました。「存在承認」の重要性をまさに自らの経験をふまえて身をもって伝えられる若者たちが教職に就かないことは、同じような生きにくさを抱える子どもたちの間接的な排除へとつながり、めぐりめぐってこの社会の生きにくさを増殖させてしまう結果をもたらします。

第三に、教職という仕事を続けても将来的に「子育てとの両立」が困難になるのではないかと不安が増幅させられていることも示唆的でした。既存のジェンダーの支配的構造を反映するように、この不安と葛藤を抱えるのはもっぱら女子大生です。まさにジェンダーをめぐる予期的社会化が教職という労働のありようと共振しているかのようです。

第四に、かれらが教職課程、とりわけ教育実習を経験する中で教職への道を進むことになる誘因は給料の高さではなく、教職がもっと人間と人間が普通に学び合える余裕ある環境の方なのです。かれらが批判的に問うているのは、教員の仕事時間の長さと同時に、いやそれ以上に、児童生徒の人数等に起因する負担があまりにも大きすぎるということです。1クラスあたりの人数を減らすことにつながる改革でなければ、かれらを教職に呼び戻すことなどできません。かれら自身の言葉からこののっぴきならない現実が浮かび上がってきます。

最後に、労働環境が変われば将来は教職に就きたいという思いをかなり多くの若者が共通に抱えていることも事実です。このことはかすかな希望を感じさせることにはなりますが、悠長な受け止めはできません。若者たちからの最後通告であるかのように、留学を選択した女子学生はこう語っていました。

「…こんなに教師向いてるのになって私自身も思うし、友達からも言われて自分でも教師いいなって思うけど、ただやっぱり日本では教師は無理だよ、こんなブラックなのは無理だよって言って、何人

ももう民間就職に決まっていて、私のこの今回の4年生のお友達でも。何か、ほんとにもったいない日本って思って、何でもっと教育にお金を割いてあげなくて、ここまで頑張って、こうしたいって思ってる人がいるのに、それをやっぱり諦めさせるほど劣悪な職場環境だったりするのは、『ちょっともったいなさすぎるよ、日本』って思っちゃうのがもう悔しい気持ちですよね。」

ケア労働への正当な応答を

教職の危機は、「教員が減って困っている」という現象の根っこにある「危機の本質」を掴まない限り乗り越えられないのではないのでしょうか。若者たちが読み取っているように、まっとうな学びの条件を整える上で、最後のハードルになるのが「ケア労働としての教職」への社会的なまなざしの変革です。すなわち、私たちの社会がいわゆる再生産労働によって生み出された（不可視化された）価値と関係性によって支えられていることを正当に思い起こすことが出発点です。自然の猛威によって気づかされることもなく、「公金」を吸い取っていく「貪欲な怪物」の本質を見抜いて、オルタナティブな社会像をイメージし共有することがカギを握るはずです。しかし、トートロジー（循環論）と指摘されるかもしれませんが、その意識を形づくる契機となるのもやはり公教育です。その公教育がまた資本主義の歪んだ現実や国家の都合によってつくられているとするならば、その歪み自体を回復させるために公的権力を取り戻す、あるいは、脱権力するための見取り図を教育の内と外でイメージすることが欠かせません。

その先にこそ、複数性を前提にしつつもいっしょに生きていくインクルーシブな社会が実現する可能性があります。金融資本主義の甘い汁を吸う世界の構造を揺さぶりつつ、無意味な競争に翻弄され時間を奪い取れないようにひとつひとつの「場面」でどちらを向いて行動するかが問われているのではないのでしょうか。「社会がこうなっているから…」とあきらめるのではなく、具体的なできごとや一人ひとりのしんどさを真ん中に据えながら、外の世界を変えていくためのわくわくするような試みに私自身も希望をもって取り組んでいきたいと思います。

※ナンシー・フレーザー（江口泰子訳）『資本主義は私たちをなぜ幸せにしないのか』ちくま新書、2023年（2022）